

## 恋ヶ窪廃寺跡(国分寺市)

駅から南にのびる車道に沿って、とみん銀行と、たましんの二つの銀行に挟まれる一画が恋ヶ窪廃寺跡で、お坊さんや尼さんの、病院であり養老院であったといわれるという





前方にはJR武蔵野線が走っており、その向こう側にかけて恋ヶ窪廃寺が広がっていたようだ



この周辺が恋ヶ窪廃寺跡ということだが既に開発が進みこのようになっている







恋ヶ窪の地名は室町時代の「旅する僧侶」准后道興(じゅこうどうこう)が「廻国雑記」に詠んだ歌の中にも出てくる



参考ホームページ

<http://www.asahi-net.or.jp/~hm9k-ajm/musasinorekisi/kamakurakaidounosyuku/koigakubo/koigakubo3/koigakubo3.htm>

ここから武蔵国分尼寺へと続く道は「史跡通り」と名付けられている













## 史跡通り

天平十三年（西暦七四一年）に市名の起源でもある武蔵国分寺が建立されましたが、元弘三年（西暦一三三三年）に新田義貞と北條泰家との戦いのため武蔵国分寺は、惜しくも焼失してしまいました。現在、武蔵国分寺の跡地は国の史跡に指定され史跡公園として整備されつつあります。

昭和四十八年四月に西国分寺駅が開設されてから、この道路を地元の皆さんが史跡公園に通ずる道路であることから「史跡通り」と呼ぶようになりました。

この史跡通りは、通過交通の進入を抑制するとともに、自動車の低速化により安全性の向上と違法駐車等の排除、車いすの通れる横断歩道等、地区内道路の利便性及び緑化、美化等により生活環境の向上に役立つような道路にしました。また、史跡通りのイメージとして、平板舗装は縄文土器を意味し、土器の紋様や武蔵国分寺瓦の紋様を配しました。

昭和五十六年四月

国分寺市

周りは住宅団地の一群



国分寺市文化財資料展示室にあった恋ヶ窪廃寺跡についてのパネル

こい ぐぼ ばい し あと  
恋ヶ窪廃寺跡



西園寺駅南東90mの扇町三丁目33番一帯にあります。  
古瓦や板碑の出土によって江戸時代末期には鎌倉の注目するところになっていましたが、府中街道脇の林として長い間保存されてきました。  
昭和40年の西園寺駅舎建設の前夜から開発の波にさらされ、現在遺跡の大半はビルの下になっています。

昭和46年から昭和63年まで5次にわたる調査の結果、礎石建物跡1棟・竪立柱建物跡6棟・礎石9基の他、土壇基12基・火葬基6基など古代から中世にかかる遺構が多数発見され、大きく3層の遺構がとらえられる寺院跡であることが判明しています。



【礎石建物跡全景】

遺跡の範囲は道路や鉄道などのため明らかになっていません。

出土品には、板碑や瓦葺印模など中世の供養塔や瓦葺屋根・古銭などがあります。

でん しょう ぶつ し あと  
伝祥応寺跡



本跡は尼寺伽藍の一部とする説もありましたが、近年の調査によって、鎌倉時代末頃に建てられた寺跡と判明し、本多四丁目の祥応寺の前身にあたと考えられています。

旧鎌倉街道と交わる切り通しに東西して、土壇(基礎部幅3m、高さ1.2m以上)と溝とで東西30m、南北45mの長方形の区画が形づくられています。現存する大小15個の礎石の分布などから、東西9m、南北18mほどの規模の堂がその中央にあり、互を向いない建物だったと推定されています。

出土品には鉄製風鐸、板碑、銭貨などがあります。



【板碑出土状態】



【伝祥応寺跡全景】

## 恋ヶ窪廃寺跡についての説明

西国分寺駅南東90mの泉町三丁目33番一帯にあります。

古瓦や板碑いたびの出土によって江戸時代末期には識者の注目するところとなっていました。府中街道脇の林として長い間保存されてきました。

昭和46年の西国分寺駅舎建設の前後から開発の波にされされ、現在遺跡の大半はビルの下になっています。

昭和46年から昭和63年まで6次にわたる調査の結果、礎石建物跡1棟・掘立柱建物跡6棟・塀跡5条の他、土壙墓12基・火葬墓6基など古代から中世にかかる遺構が多数発見され、大き

く3期の変遷がとらえられる寺院跡であることが判明しています。

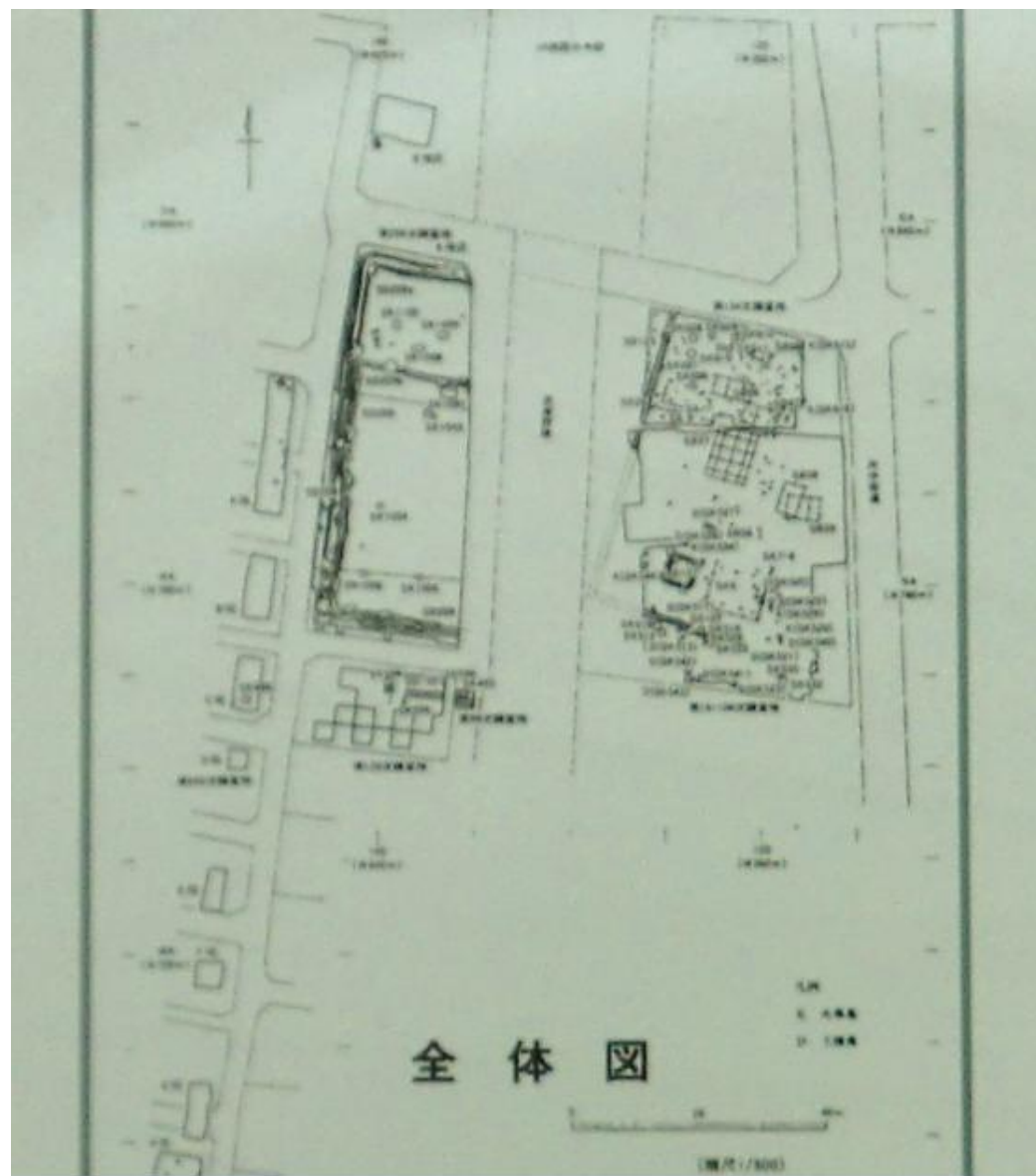
遺跡の範囲は道路や鉄道などのため明らかになっていません。

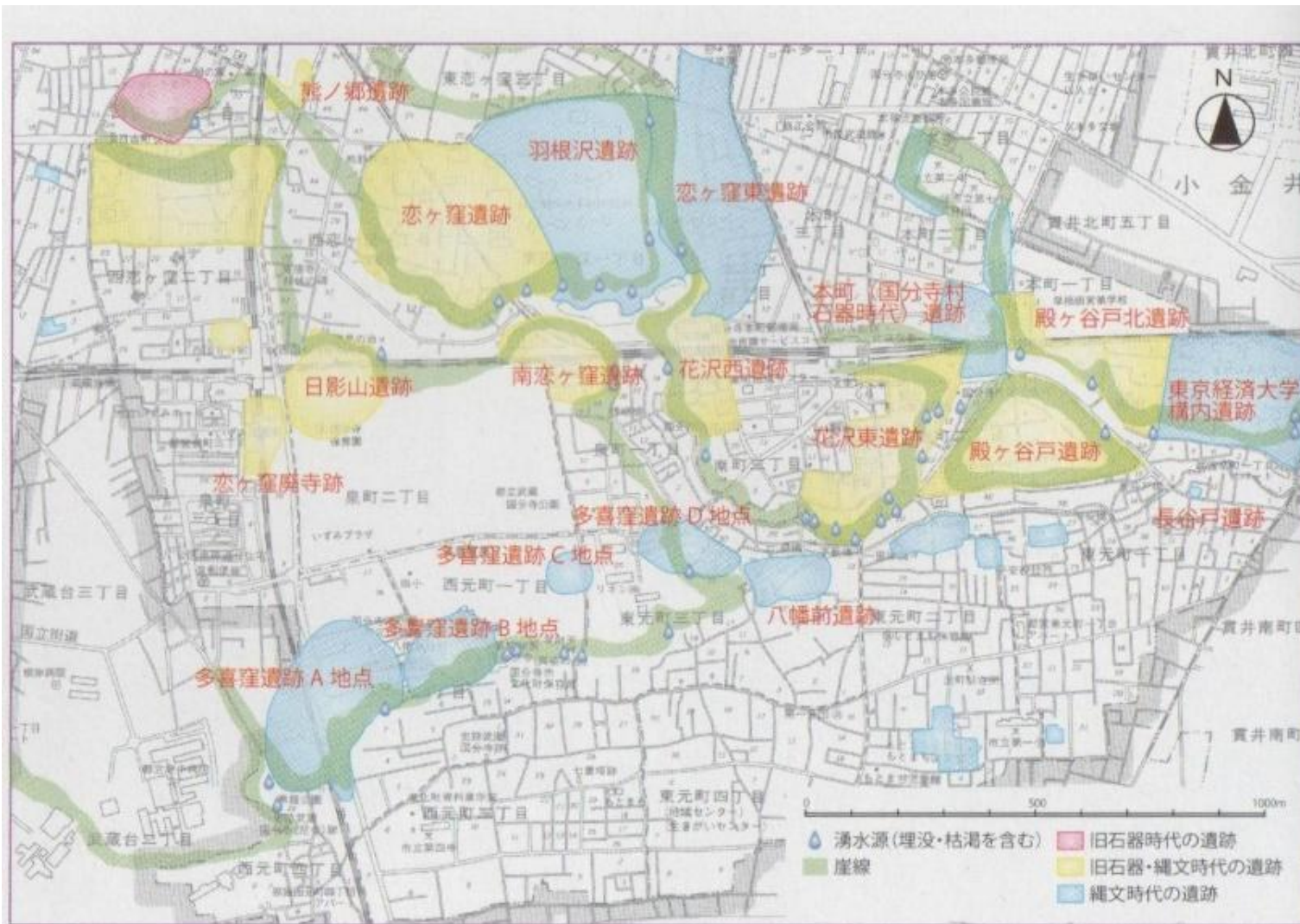
出土品には、板碑や宝篋印塔ほうきょういんとうなど中世の供養塔くようとうや灰釉華瓶かいゆうけびょう・古銭などがあります。



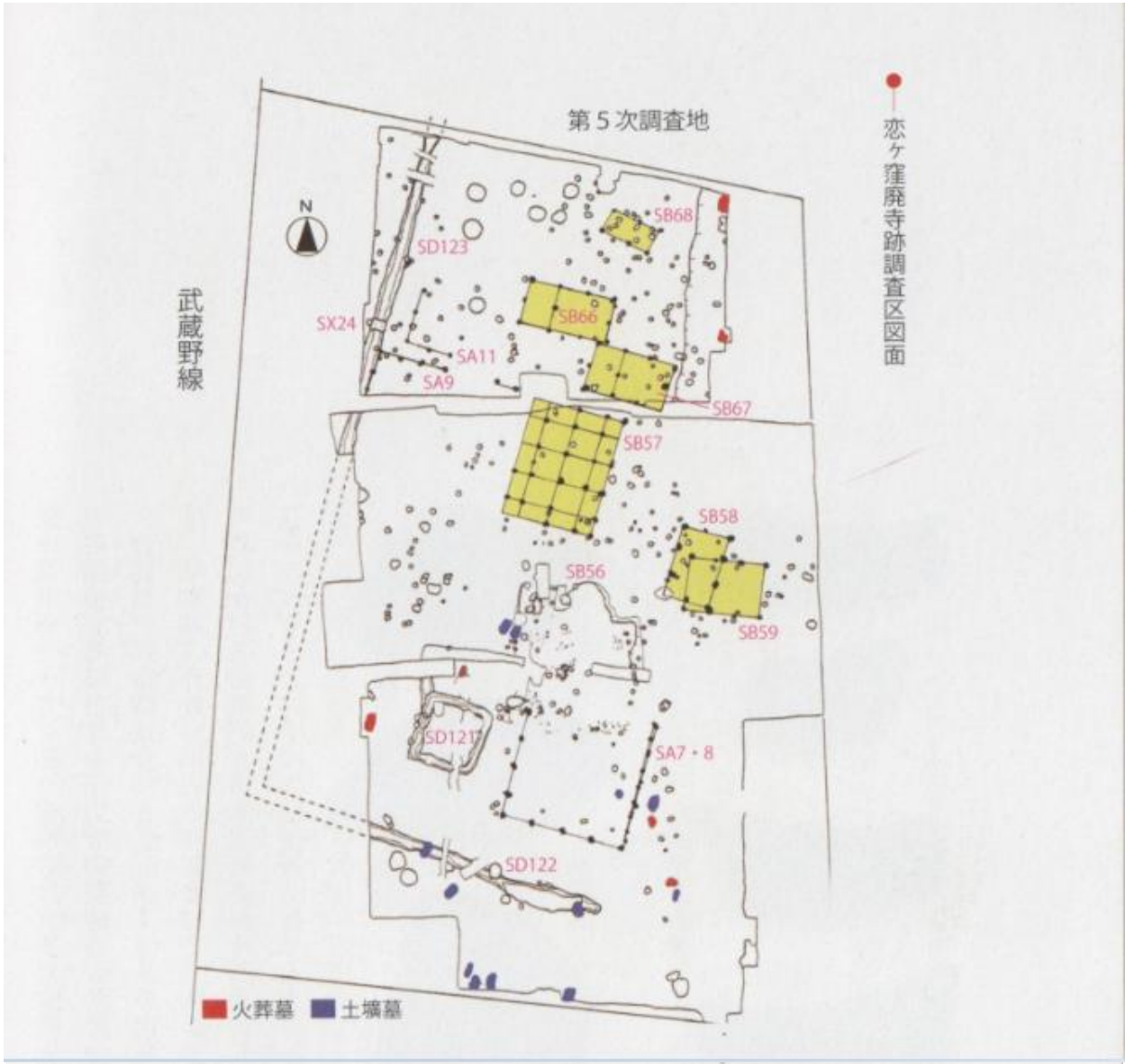
【礎石建物跡全景】







● 国分寺市内東南部の旧石器・縄文時代遺跡分布地図



第一期（平安時代後半） 国分寺の同範瓦を葺いた礎石建物跡（SB56）一棟のみからなり、創建期に当たります。

第二期（鎌倉時代） 寺跡の東端を通る伝鎌倉街道に面して「型」に区画溝（SD122・123）をめぐらし伽藍地となし、中央部に本堂（SB57）・庫裡（SB67）などの掘立柱建物を計画的に配置する本格的な寺に再建した時期に当たります。

第三期（鎌倉末期～戦国時代） 第二期の区画溝が埋まり、南側地域に土壇墓、火葬墓が営まれた衰退期に当たります。

恋ヶ窪廃寺は中世に最盛期を迎えますが、創建期の建物一棟からなる施設の性格は明らかではありません。

位置および建物の内容からして、僧・尼の病を癒す療養所であったとする考えもあります。こうしたことが契機となって鎌倉時代に本格的な寺に再建されたと推察されます。



● 恋ヶ窪廃寺跡出土の軒先瓦



● 恋ヶ窪廃寺跡 板碑出土状況

恋ヶ窪廃寺 一方、恋ヶ窪廃寺は、勝呂廃寺・女影廃寺跡・高岡廃寺跡とは異なり、国分寺に隣接することから国分寺の関連施設が置かれたと考えられます。

寺跡は、国分寺跡から五〇メートルほど離れた西国分寺駅南東の泉町三丁目にあります。昭和四十六年から同五十六年にかけて五回行われた発掘調査によって、平安時代から戦国時代にかけての遺構が多数発見されました。これらは、大略三期にわたる変遷が想定されています。



ここは武蔵台遺跡公園



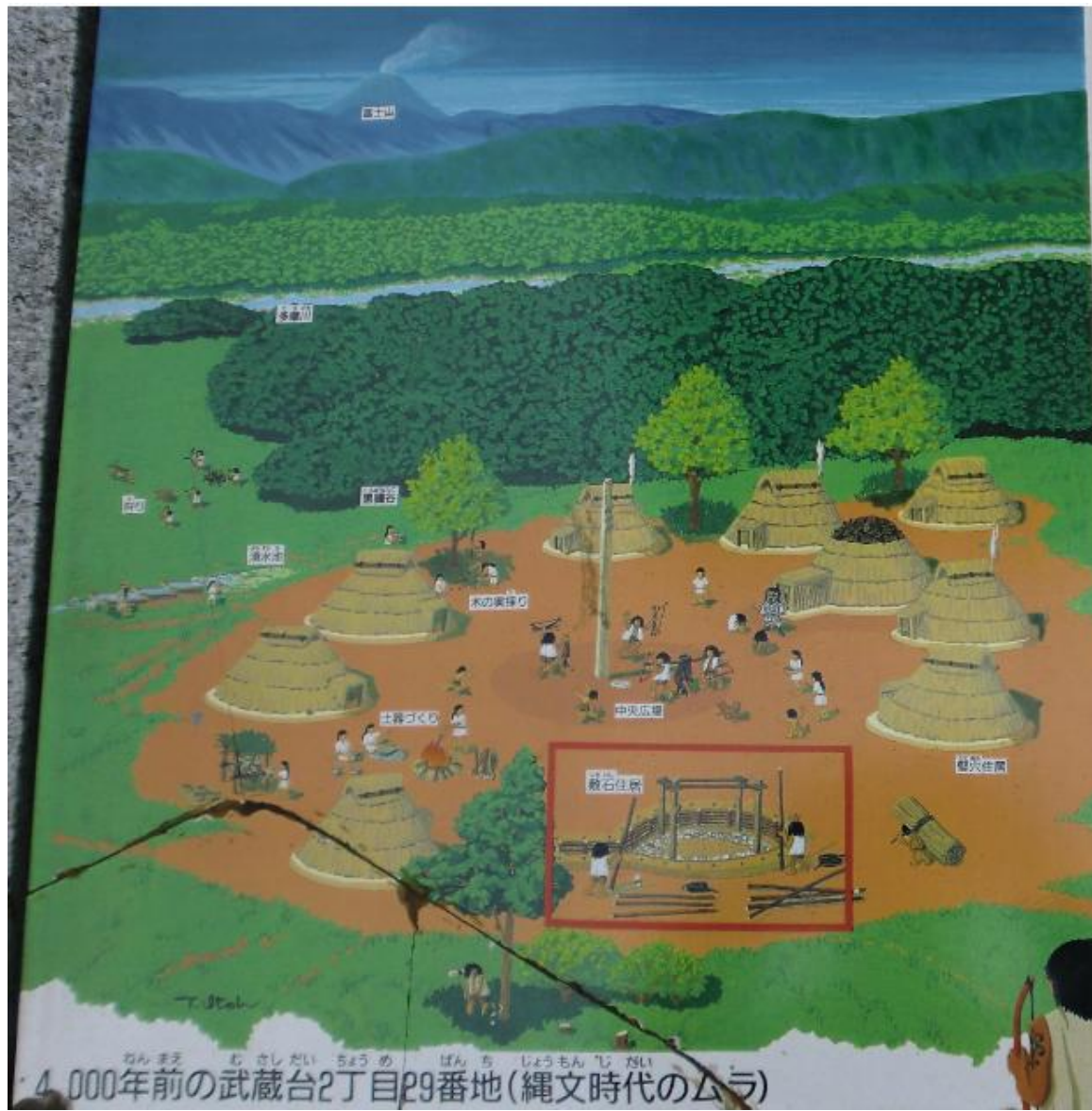






武蔵台東遺跡の柄鏡形敷石住居跡と呼ばれる縄文時代中期(約4000年前)の住居跡を、発掘した時の状態で移し替えたものという





4,000年前の武蔵台2丁目29番地(縄文時代のムラ)



印が移された遺構です。

4000年前も住宅地だった！

東京都中央区新富町丁目第2アパートでは、建設に合わせて縄文文化財の発掘調査が実施されました。その結果、数多くの住居跡や土器・石器などの遺物が発見され、史跡名「縄文遺跡」と名付けられました。

ここにあるものは、縄文前期後段と呼ばれる縄文時代中期(約4000年前)の住居跡で、発掘した時の状態で残っており、縄文時代の縄文後段跡は発掘後に取り壊されたものの作りかえが多いのですが、ここでは原状に数多くの田舎石が平に敷かれています。石の上には土器の土層が露出し、石の隙からは竹筒や骨が発見されました。田舎石の中央には井戸が作られ、突き出した部分には深鉢型土器の埋め込まれています。

この遺跡からは、縄文時代の竪穴住居跡が複数発見されました。今から約4000年前と約4000年前のものと考えられます。一時期のムラの住居の数は10軒程度だったと考えられます。

当時のこの辺りは、豊かな自然や水に恵まれた土地でしたが、暑さ寒さの厳しい自然のなかで、人々は力を合わせて家や道具の製作や狩猟、シカのイノシシを狩るなど、たくましく生きていたことでしょう。



## 4000年前も住宅地だった！

都営府中武蔵台2丁目第2アパートでは、建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。その結果、数多くの住居跡や土器・石器などの道具が発見され、武蔵台東遺跡と名付けられました。

ここにあるものは、柄鏡形敷石住居跡と呼ばれる縄文時代中期（約4000年前）の住居跡を、発掘した時の状態で移し替えたものです。縄文時代の竪穴住居跡は地面を掘り込んだだけの作り方が多いのですが、ここでは床に数多くの川原石が平に敷かれています。石の上には深鉢形土器が置かれ、縁石の間からは打製石斧が発見されました。円形部分の中央には炉が作られ、突き出した部分には深鉢形土器が埋め込まれています。

この遺跡からは、縄文時代の竪穴住居跡が80軒程発見されました。今から約9000年前と約4000年前のものと考えられます。一時期のムラの住居の数は10軒程だったと思われます。

当時のこの辺りは、豊かな森や水に恵まれた土地でしたが、暑さ寒さの厳しい自然のなかで、人々は力を合わせて木の実や草の根を集めたり、シカやイノシシを狩るなど、たくましく生きぬいたことでしょう。





柄鏡形敷石住居跡



この道は旧鎌倉街道で、この右手一帯が武蔵台東遺跡であったが既に住宅地となっている





旧鎌倉街道





平成二十一年三月十一日の条例に基づき  
この道路(切通し)は  
国指定の史跡地内にあり  
鎌倉街道として  
保存するために  
車両の通行止め  
を実施しています



小金井警察署 国分寺市



ここで街道の左手を登ると塚(修法壇跡で街道の反対側にあった伝祥応寺と関連があるといわれる)がある





# つか塚

この塚(盛土遺構)は底面1辺約22m、高さ約3mで、1辺約7mの平坦な頂部を有する方錐体と復元され、周囲の地山層(黒褐色土)を削った土で築かれている。旧来「土塔」といわれ、国分寺に關係を有するものとされてきたが、2度に及ぶ発掘調査の結果、中世(14・15世紀頃)において種々の祈願の成就を得るために、作法に則り本尊に対し祈禱するために築かれた修法壇跡で、伝祥応寺との關係を有するものと推考される。

鉄道拡張工事に伴う第1次調査(1969)では、下層より平安時代竪穴住居跡2軒、盛土内より明銭(洪武通宝、1368年初鑄)1枚、頂部に主体部と思われる粘土敷き硬化面、その付近より梅瓶型瀬戸灰釉瓶子1点や素焼きの土師質土器細片数点などが出土している。



昭和44年(1969)発掘調査時の塚美測図

昭和44年(1969)発掘調査跡  
平成22年(2010)発掘調査跡

国分寺市教育委員会

前方が塚の高まり







塚の頂部



頂部から見下ろす



街道に下り、反対側の階段を登ってみる





この一帯は伝祥応寺跡



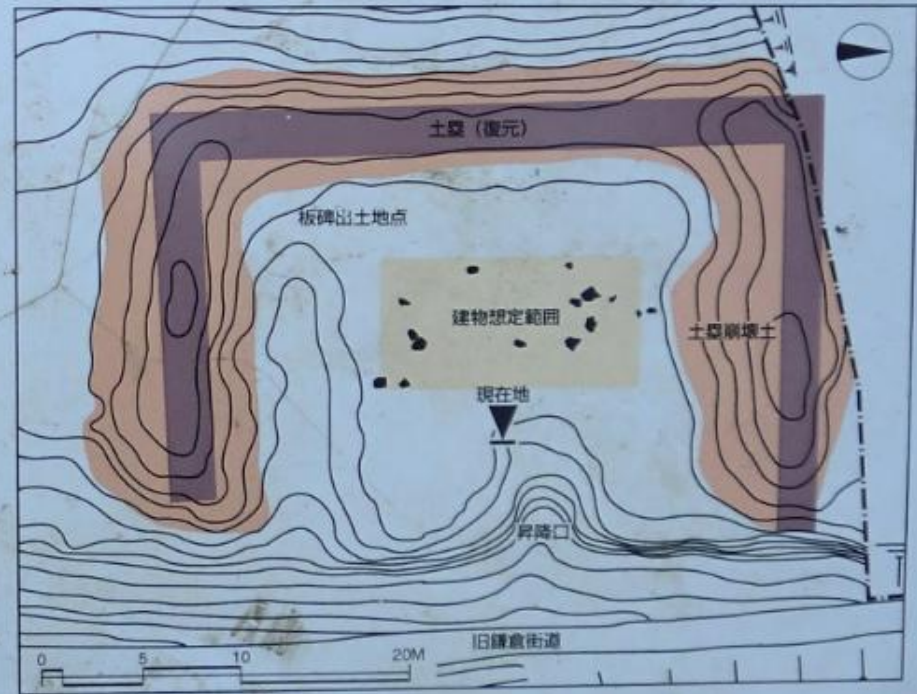
鎌倉時代末頃の寺跡

でんしょうおうじあと  
伝祥応寺跡

(中世寺院跡)

本跡は尼寺伽藍の一部とする説もあったが、近年の調査によって、鎌倉時代末頃に建てられた寺跡と判明し、本多四丁目の祥応寺の前身にあたると考えられている。旧鎌倉街道と言われる切通しに東面して、土塁（基底部幅3m、高さ1.5m以上）と溝とで東西30m、南北45mの長方形の区画が形づくられている。現存する大小15個の礎石の分布などから、東西9m南北18mほどの規模の堂がその中央にあり、瓦を用いない建物だったと推定される。

出土品には鉄製風鐸、板碑、銭貨などがある。



伝祥応寺跡全体図 (平成7年度調査)

国分寺市教育委員会

周囲には土塁が復元されている









土墨崩壊土





この辺りで板碑が出土している









右下が街道





国分寺市文化財資料展示室のパネル

こい け くら ばい じ めと  
恋ヶ窪廃寺跡



西国分寺駅南東90mの泉町三丁目33番一帯にあります。  
古瓦や板瓦の出土によって江戸時代末期には廃寺の注目するところになっていましたが、府中街道脇の林として長い間保存されてきました。  
昭和46年の西国分寺駅舎建設の前頃から開発の波にさらされ、現在遺跡の大半はビルの下になっています。

昭和46年から昭和63年まで6次にわたる調査の結果、礎石建物跡1棟・瓦立柱建物跡0棟・欄干跡5条の他、土溝基12基・火葬基6基など古代から中世にかかる遺構が多数発見され、大きく3期の築造がとらえられる寺院跡であることが判明しています。

遺跡の範囲は道路や鉄道などのため明らかになっていません。

出土品には、磁器や瓦葺印場など中世の伊勢崎や沼津系瓦葺・古銭などがあります。



【礎石建物跡全景】

でん しょう おう し めと  
伝祥応寺跡



本跡は尼寺伽藍の一部とする説もありましたが、近年の調査によって、鎌倉時代末頃に建てられた寺跡と判明し、本多四丁目祥応寺の前身にあると考えられています。

旧鎌倉街道と言われる切り通しに東西して、土塁(基礎部幅3m、高さ1.2m以上)と溝とで東西30m、南北45mの長方形の区画が形づくられています。現存する大小15個の礎石の分布などから、東西9m、南北18mほどの規模の堂がその中央にあり、互を向いない建物だったと推定されています。

出土品には鉄製馬鐙、板鏡、銭貨などがあります。



【板鏡出土状態】



【伝祥応寺跡全景】

### 伝祥応寺跡についての説明

本跡は尼寺伽藍の一部とする説もありましたが、近年の調査によって、鎌倉時代末頃に建てられた寺跡と判明し、本多四丁目の祥応寺の前身にあると考えられています。

旧鎌倉街道と言われる切り通しに東面して、土塁(基底部幅3m、高さ1.2m以上)と溝とで東西30m、南北45mの長方形の区画が形づくられています。現存する大小15個の礎石の分布などから、東西9m、南北18mほどの規模の堂がその中央にあり、瓦を用いない建物だったと推定されています。

出土品には鉄製風鐸、板碑、銭貨などがあります。



【板碑出土状態】



【伝祥応寺跡全景】



全体図

前方は緑地広場





街道を振り返る









# でんかまくらかいどう 伝鎌倉街道

鎌倉時代、幕府の置かれた鎌倉と各地を結び、のちに「鎌倉街道」と総称される幹線道路が整備されていった。武蔵国内を通るものうち、<sup>がふのみち</sup>上道（律令制下の<sup>とうざんどうむさしみち</sup>東山道武蔵路をほぼ踏襲する）は特に有名である。

市域を通過する「上道」は鎌倉から町田、府中をへて北上し、上野、信濃に至っており、街道沿いに有力御家人が勢力を振るっていたことから軍事的にも重要な道路であったことが知られる。

市内の上道の道筋は、この切り通しを含めて部分的に伝承されており、北方の伝祥応寺跡や恋ヶ窪廢寺跡（西国分寺駅東南）発掘調査の結果、次第に明らかになりつつある。

（国分寺市指定史跡、平成4年2月1日指定）



伝鎌倉街道の道筋

国分寺市教育委員会



# 掘立柱建物跡



この公園にふさわしい掲示がしてある







国分寺跡地黒鐘公園



武蔵国分尼寺と僧寺(武蔵国分寺)の間を南北に走る古代東山道武蔵路に当たるところから発見された

\*ID No. 37-197

～都指定有形文化財(彫刻・考古資料)～

## 銅造観世音菩薩立像

(指定：昭58.5.6)

この銅製の観世音菩薩立像は、昭和57年(1982)3月、武蔵国分尼寺寺域確認調査の際、僧寺と尼寺の間を南北に走る古代東山道武蔵路(上野国を結ぶ道路)に当たるところから発見されました。

像は、頭部に阿弥陀如来の化仏を施した低い三面宝冠をいただき、欠失していますが蓮肉の上に立っています。

面相はやや面長で、口元は笑みをたたえています。そして、胸幅は広く、下腹部を前方に突き出した体軀がこの立像の特徴と言えます。

こうした作風は、奈良法隆寺の夢殿観音像や、六観音像と類似することから、白鳳時代後期(7世紀末～8世紀初頭)に制作されたものと考えられています。

現在、関東地方で知られている白鳳仏の中でも最も古い像であり、素材の銅の科学的な分析結果から、国内で初期に採掘された銅が利用された可能性が高く、その意味でもこの像は貴重な文化財と言えます。

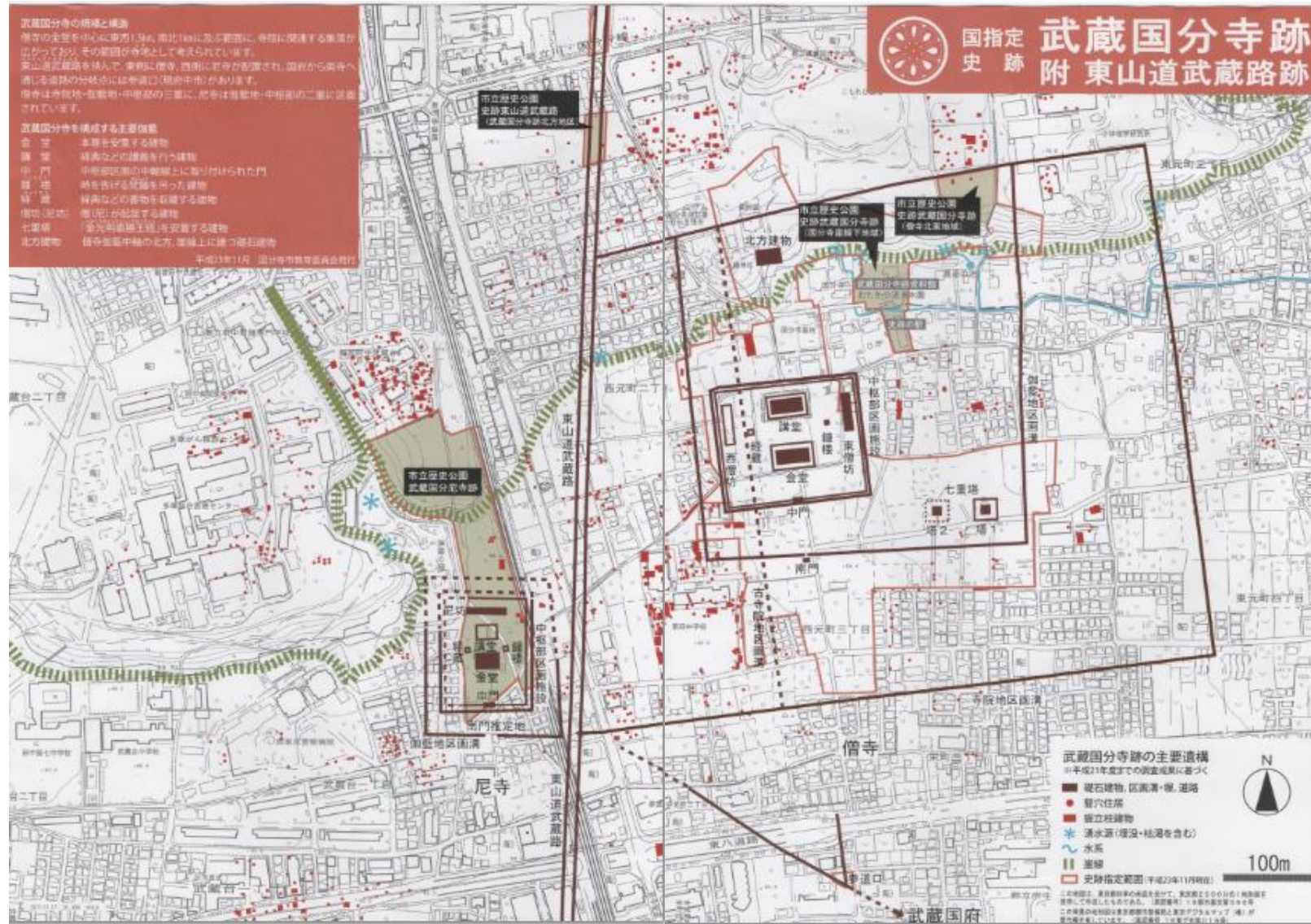


■写真提供：  
国分寺市教育委員会

- 公開場所／国分寺市西元町1-13-10 武蔵国分寺跡資料館
- 交通／JR中央線・武蔵野線「西国分寺」駅下車徒歩15分



東山道武蔵路(奈良時代の官道)



旧鎌倉街道は東山道武蔵路にほぼ平行してその西側を走っており、重なる区間もあるという